The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	洛星高校での授業を振り返って
Author(s)	樫本, 直樹
Citation	臨床哲学のメチエ. 2007, 16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9978
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

洛星高校での授業をふり返って

樫本直樹

前年度に引き続き、今年度も洛星高校での授業を担当することになった。前期では「哲学的に考えること」に重点をおいた基礎編、後期は「哲学すること」に重点をおいた実践編として授業を組み立てた。私自身も後期に授業を受け持ち１年がすんなり終わる予定であった。が、大失態をしてしまった！最後の授業で寝坊をしてしまった！朝起きたら授業が始まっている時間であった。みなさん、ごめんなさい。

そういう理由もあって、ここでは最後のふり返りの授業で話したかったことを中心に書きたい。後期は生徒自身が考えた〈問い〉をもとに哲学カフェのように進行役が一人入って議論をするという形式をとった。私の担当した回では「延命に価値はあるか」という問いをめぐって議論を行った。さて、最終回のふり返りにおけるこの議論に対する生徒の評価は、聞くところによるとあまりよくなかったようである。みなが好きなことを言い合い、論点がまとまらず、どこに向かっているのかわからず、議論しにくい、哲学的でない、云々。確かに他の二人 (紀平さん、高橋さん) はテキストを用意したので議論はしやすかったようだ。私は何も用意せず、いきなり「では‥」と始める形式だったので不満が大きかったのかもしれない。でもあえて、議論は比較的よかったと言いたい。

ふり返ってみよう。問いは「延命に価値はあるのか」であった。生徒はまず「価値がある / ない」の判断の基準ではなく、「延命」という語にコミットした。「延命」にどういう事柄が含まれるのかということから議論は始まり、「食べることは含まれるのか」「輸血や手術はどうか」「人工呼吸器をつけること」という発言がよせられた。そして「食べること」を今ここでいれてしまうと議論が広がりすぎる」という指摘がなされ、今回の議論では取り上げず、多くの人が「延命」ということで「延命治療」を考えていることがわかった。

次に延命治療ということでどういう状況を考えるのかという点について「植物状態」「闘病 (末期)」、事故に伴う「緊急の手術」などをめぐって発言が交わされた。その発言のやり取りの中で見えてきたのは「延命」というのは「終わるはず

のものを終わらせなくする部分」(つまり、本来3日のところを10日に延ばす場合、3～10の7日間の部分を延命と呼ぶということ)のことだろうということであった。

上の議論と同時に「誰にとっての価値が問題なのか」という視点からの発言もあった。こちらの議論では、「本人が決定できる時には延命とは言わないのではないか」という発言をきっかけとして、「本人が決定不可能でまわりの人がきめなくちゃならない時に延命が問題になる」という発言、さらに「まわりの人が(患者)本人のためを思って決めるか、まわりの人たちのことを思って決めるかによって問いの意味も変わる」という発言につながった。そして「延命に価値があるか」という最初の問いは、まわりの人たちにとっての延命の価値が問題になる時に意味をもつ、そしてそこを問題にしようと一致したところで時間がきた。

どうであろうか。もちろんこれらの発言の間には、多くの脱線や論点に一見すると関係なさそうな発言などがはさまり、また上の二つの論点が同時に話されたこともあって全体の印象としては雑然としていた。でも、いろんな考えをもった人びとが集まればそんなものであろう。それよりもさまざまな論点が示され、議論をするための準備までできたという点を評価したいと思う。その点において、上手く対話になったかどうかはともかく、今回の議論はまあまあよかったのではないかと思う。

この議論を通して、哲学的に対話するとはどういうことかについて考えさせられる部分もあった。今年度の授業では「哲学的に考える」ということで、特に「判断に対する根拠(理由)」を吟味するという点を重視したが、そのことは哲学的に考える/対話することにとっての一側面にすぎないだろう。違った角度からにはなるが、哲学的に対話するためには、そしてその対話を哲学的にするためには、議論に、そして自分以外の発言に対してどのように向き合うのかというこちら側の態度がまず問題になるのだ、ということを強く感じた。生徒達の議論を見ていても、自分と異なる意見に対する反発、自分の意見を理解しない他人に対する苛立ちがよく目についた。その時に自分の考えと異なる他の発言をどんどん切り捨てていくのではなく、一旦立ち止まり、その発言の根拠のさらに背景にさかのぼろうとする想像力、そしてそもそもその議論そのものに向き合う際の自分の態度。表現がふさわしいかどうか自信がないが「相手を慮ること」といえばいいだろうか。まず私が相手を慮ること。でもこれは単に相手の存在や気持ちを考えましょうということとは何か違いそうだ。この「慮り」への引っかかりに引っかかりを感じつつ、感想にかえたいと思う。

洛星高校の授業にかかわったコーディネータのみなさん、洛星高校の栗栖先生、1年間ありがとうございました。